

「働かずに成長できる日本を」は「頭を使ったスマートな方法を模索」を意味する

本記事が触れている内容はかなりの的を射たものであると思う。たとえば「老人の労働力化は完全に文明の発展からの逸脱である」などは現在社会が直面している問題そのものである。国は一時「退職時に老後資金 2000 万円が必要」と口を滑らせ後日これを撤回したが、このことは公然の秘密であり、それゆえに定年後も働かなければならないという実態がそこにはある。

私も現在 68 歳、この働かなければならない年齢に含まれる。思い返せば、就職はオイルショック後の嵐が強く吹き荒れる超氷河期(1976年)で、かろうじて滑り込んだ会社ではひたすら働くことが求められ、その評価基準は残業時間の多さであった。そこには頭

脳労働(スマートさ)というものが存在しなかったように思う。このころの日本社会はおおむね前例主義、前例から外れたことをするとはじかれる。化学系の研究所といえどもこの例外ではなく、新反応を見出すと何かの間違ひではないか? なぜそんなことをしたのか?と言われることが多かった。おそらくは、日本社会が欧米諸国に追いつくことをめざし、そこに存在する前例にいかにも早く近づくといいことを競っていた時代であったのだろう。

日本経済新聞
2019年(令和元年)10月5日(土曜日)

大機小機

文明発展の原動力の一つは、働きたくない、誰かに働かせようとの願望だろう。そのために昔は戦争をした。奴隷制度もあった。今では機械化であり、それと情報の組み合わせである。戦争でさえミサイルやドローンに主力が移り、陸軍に代表される人間の役割は後退している。以上を念頭に、我が国を振り返ってみよう。高度成長期の企業の成功は従業員数に象徴された。戦国大名の力が武士の数で決まったのに似る。終身雇用や新卒一括採用などの労働慣行が、この当時の成功を補強した。日本が人口減少社会に入ったことから、労働力不足が懸念され、女性や老人まで動員し、さらに海外からも人をか

働かずに成長できる日本を

き集めようとしていた。この政策が的を射たものなのか。文明発展の原動力と照合すれば、その流れとは明らかに逆である。進歩のための千載一遇のチャンス逃していると思える。まず、女性の労働力化について。男女の雇用の均等は当然だし、女性のほうが適任の分野も多い。他方、子供の立場からすれば、少なくとも両親のどちらかと多くの時間を過ごしたいに決まっている。本来的には、両親と子供が一緒に過ごせる社会環境を整えるべきである。そうすれば情緒豊かな子供の成長が期待でき、日本の将来に資する。老人の労働力化は完全に文明の発展からの逸脱である。ある意味、国民の奴隷化であり、死ぬまで働けと命じるに等しい。棄隠居を選択しやすくなるのが筋だろう。 (発亥)

的を射た政策とは、人間が働くために移動しなくても、究極は働かなくても成長できる社会の設計にある。家庭と子供の問題は比較的簡単に、情報技術を最大限に活用しつつ、大都市に集中する企業に罰則を科せばいい。経済活動が地理的に分散すれば、災害対策上も好ましい。労働力不足の問題は産業政策と関連する。労働力の希少性が増しているのだから、労働生産性の低い企業の退出を促し、社会的に無意味な分野から労働力を吸収することが正解となる。一方で、退出企業を含めた従業員の知的技能の向上を支援し、労働生産性の飛躍を図るべきである。以上からすると、今の産業政策、労働政策、金融政策は八方美人でしかない。それらを猛省すれば、明るい未来が見えてくる。

私の年代を最後として、前例主義年代の多くがすでに退職し、日本の会社や社会は今や大きく変われる可能性を持っているものと思う。私の時代に主流であった直属上司のみによる90度評価もおそらくは多くの会社で姿を消し、360度評価に切り替えている会社が増えていく。現役時代の私の実感としては、ある人の実力を一番知っているのは同期の人間であった。上司が新しい知識を吸収し続けているのであればその限りではないと思うのだが、そのことが原因してか90度評価ではこの実感と評価結果が大きくずれていることも多かった。

そして現在、労働時間一辺倒主義から解き放たれた社員が増え、「働かずにスマートに生活する方法はないか」と考えはじめる、そんな時代になってきた。「時間が生活を豊かにする」から「豊かな生活とは何か」への大きな変革が起こりつつある。これは決して悪いことではなく、日本が現在直面している二極分化の問題を解決するためにも必要となる変革である。

現在は二極分化の時代である。頭を使ってスマートに価値を創造する人と、時間を代償に生活費を稼ぐ人に二分化してしまった感があるが、前者の人口を増やしていかないことには日本は国としてじり貧の道をたどっていく可能性がある。たしかに、分業体制（役割分担）は大切であり、それが国家規模で存在することは必然であるとしても、各役割分野において頭を使い付加価値を高め、その結果として労働対価を下げることなく労働時間が短縮できれば、実りある豊かな家庭、そして将来を担う子供たちに豊かな教育環境を作っていけることも決して夢物語ではない。

労働生産性が極度に悪い会社は整理し、その資源を労働生産性の良い会社に移していく。この資源の中には人的資源も含まれる。このことができる国家となる必要がある。

ここでもう一度新聞記事を読み返すと、

労働力不足が懸念され、海外からも人をかき集めようとしている。
老人の労働力化は完全に文明からの逸脱である。

この2つの事柄を知恵で持って解決する方法があれば、心身ともに豊かな日本が実現する。その実現のための第一歩は、目の前の現実を疑うことから始まる。その常識と思っていることは本当に常識なのかと！ 現役時代、私は化学の研究所で目の前の常識を疑い、多くのブレイクスルーに巡り合った。